



お茶の水女子大学地理学教室は、女子大学で地理学を体系的に学べる数少ない教室であり、文教育学部人文科学科地理学コース、大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻地理環境学コース、同後期課程ジェンダー学際研究専攻の学生と教員から構成されます。大学院には、前期課程と後期課程あわせて18名の学生がおり、経済地理学、都市地理学、文化地理学、海外地域研究、気候学など多岐にわたる分野において研究に取り組んでいます。日ごろは各研究室のゼミで報告と議論を行っています。おおよそひと月に一度開催される教室の合同ゼミでも研究を発表しています。

今回は、宮澤研究室に所属する3人が、それぞれの研究について紹介します。

東京大都市圏における通勤流動の特性

お茶の水女子大学大学院博士前期課程2年生の小林加奈です。私は都市地理学を専攻しており、東京大都市圏の郊外住宅地居住者の通勤流動について研究を進めています。

このテーマを設定した背景には、若年層のライフコースの多様化があります。高度経済成長期に地方圏から大都

市圏郊外へ流入してきた人々は郊外第一世代と呼ばれており、郊外から都心へ通勤するホワイトカラーの核家族という性格を持っていました。しかし、1990年代後半以降になると、郊外第二世代が新たに世帯を形成するようになり、女性就業者の増加や未婚のまま親と同居する人など、様々なライフコースを選択する人々が注目されるようになりました。また、大都市圏においては、1990年代後半以降都心の人口が回復し、「都心回帰」現象として注目を集めています。近年、職住近接が実現できる都心に暮らす若い人が増えてきています。

図1は1990年と2010年の東京都心3区(千代田区、中央区、港区)への通勤率を市区町村別に表したものです。1990年当時は、東京都心3区への通勤率が20%以上の地域は東西に広く分布しています。一方2010年になると、都心3区への通勤率の高い地域はより都心の近くへと集中しています。このような通勤先の変化は、先述した世代ごとのライフコースの違いが影響を与えていると考えられます。

私は郊外第二世代が従来の世代とは異なる通勤行動や居住地を選択していると考え、その通勤流動の特性を調査することから、東京大都市圏の空間構造が変化してきていることを明らかにしようとしています。

私が郊外に住む人々を対象にしようと思ったきっかけは、私自身が千葉県郊外のニュータウンに長年居住しているためでした。幼い頃はニュータウンもまだ開発途上であり、家の周りには子どもたちの遊び場になるような空き

地が多くありました。年月を経て、空き地に商業施設やマンションが次々と建設され、街の賑わいを実感するようになりました。このような地域の変化を目にしてきたことで、自然と郊外住宅地への興味を持つようになりました。

そこで、私は住民としての視点ではなく、学問的な視点から自分が居住している郊外について見ていきたいと思い、大学進学後は都市地理学を学ぶことに決めました。研究を行っていく中で、郊外と一言で表しても、地域によって異なる特性を持っていることを知りました。自分が居住している地域しか知らなかったのに、都市地理学を学んだことで一気に地域を見る眼が広がったように感じます。現在、こうして自分の経験を発端としたテーマについて研究できていることを、誇りに思います。

都市地域におけるコミュニティバス

博士前期課程1年生の若山沙織です。卒業論文では東京都文京区のコミュニティバスについて研究を行いました。

文京区をフィールドに選んだ理由は、独特な地形と公共交通の偏りがどのようにコミュニティバスに影響を与えているか興味を持ったためです。文京区は武蔵野台地の東端部に位置していますが、図2のように複数の台地と谷のある地域です。そのため、区内を東西に移動しようとする多くの坂を通ることとなります。また、文京区内には六つの地下鉄路線がありますが、南北に伸びる路線が多く、区内の東西移動はもっぱら公営バスが担っています。しかし、公営バスも路線によっては一時間に一本から二本しか走っていないものもあります。とはいえ、東京都区部という性質上、他の地域よりも交通網が恵まれているのは確かです。そのような地域で果たしてコミュニティバスというサービスは必要とされるのか、必要とされるのなら誰が必要とするのか、そのことを明らかにしていこうと思い、文京区のコミュニティバスを研究対象に選びました。

研究の結果、文京区のコミュニ

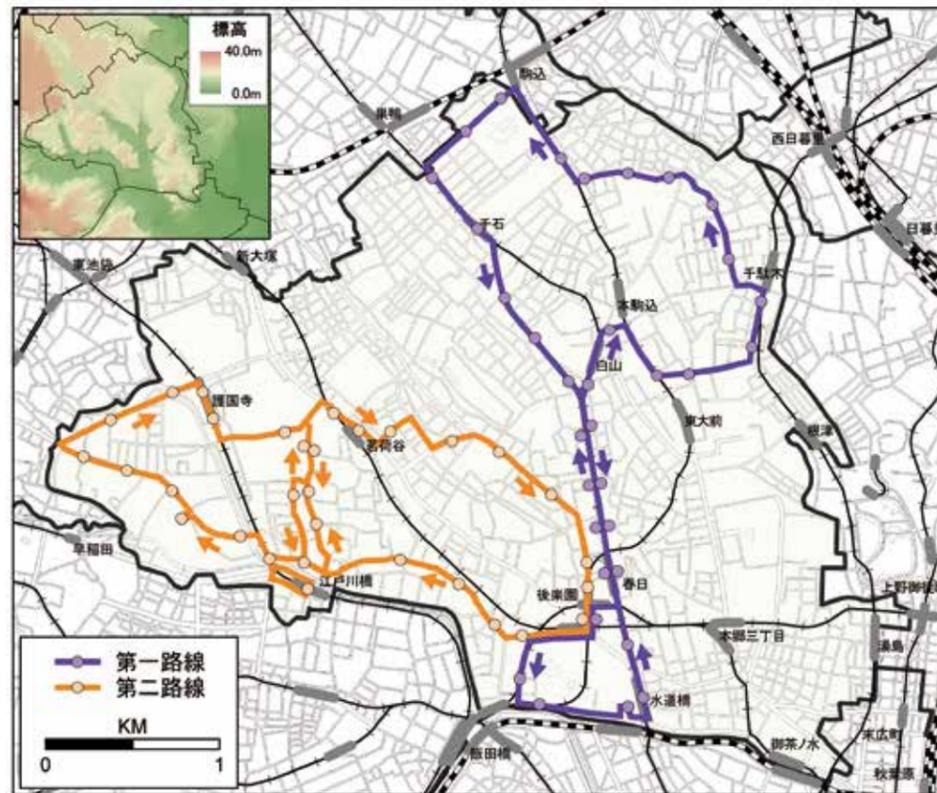


図2 東京都文京区におけるコミュニティバスの路線

バスは従来のコミュニティバスの利用形態とは異なり、区外在住の利用者が一定数いること、公共交通の恩恵が薄い地域の企業にとっては会社のシャトルバスに代わる交通機関として社員に利用されていることがわかりました。また、コミュニティバスの利用者が参加できる組織によって、バスルートの変更やバス普及のための企画を行うなど、他の地域では見られない運営も行われていることがわかりました。一方、新規に開設された路線において利用の低迷が続いており、市民の要望や公共交通の空白地域を埋めるかたちでのルート設定では想定した利用者数に達しないこともわかってきました。東京

都区部では、利用者として地域に住む人々だけでなく、日中その地域を訪れる人々をいかに取り込むのが、コミュニティバス運営の鍵だと考えました。

修士論文においては、都市地域におけるコミュニティバスの多様な可能性を考えるため、複数の地域をとりあげて比較研究を行っていきたくと思っています。

地図の掲載と匿名性について

博士後期課程3年生の三浦尚子です。私は、精神障害によってさまざまな困難を抱えながらも地域のサポートを得ながら生活されている方々を対象とした研究を行っています。今回は、

障害者自立支援法施行に伴い再編された障害福祉サービス事業に対する、とある自治体に立地する事業所の戦略的な取り組みをテーマに執筆した論文に関するエピソードを紹介します。

その論文を地理学の雑誌に投稿した時、編集委員会から「調査地を特定することに対する彼らの不利益を考慮し、自治体名の公表を避けるべきではないか」というコメントをいただきました。

そのことを調査にご協力いただいた現場のスタッフさんに伝えたところ、「おとぎ話の国の話にしちゃうの?」と切り返されました。むしろ匿名にしたほうが、違和感があるという雰囲気、福祉の現場にはありません。地図を掲載すべきか、やめるべきか、そのとき私は本当に悩みました。最終的に、自治体担当者の方が匿名性を尊重してほしいという姿勢を示されたので、地図の掲載を断念しました。

人文地理学の研究において地図を使用することは、研究対象者の生き生きとした経験を社会に示すことだと私は思います。地図を掲載しないということは、むしろ私の研究対象である精神障害の方々が、地域で頑張っている様子を隠してしまうような、そんな気がします。それでも、精神障害者に対する偏見を考慮すると、自治体を匿名にしたことは決して間違いといえなかったことも事実であり、もどかしい思いと、安心した思いと両義的な感情が私の中に湧きあがっています。地図を掲載することが当然である地理学の風潮が、精神障害の方々に対応できるような、そんな心広い社会になりますように、そう願うばかりです。

小林加奈・若山沙織・三浦尚子

宮澤研究室の所属学生は大学院生3名と学部の卒業生3名です。研究のテーマはそれぞれバラバラです！それでも、異なるテーマに対しても真摯に傾聴する姿勢と必ずコメントを出すという積極性は、学年を問わず培われています。たとえば、高齢者福祉がテーマであれば親族の身近な介護体験を語り合ったり、ニュータウンがテーマであったら様々なニュータウンの特徴を、自分の経験を交えて吟味合ったりします。調査や論文執筆にくじけそうな時にも、みんなの取り組みに触発されて、そして宮澤先生のきめ細かい指導に支えられて頑張っています。少人数の贅沢さを大切に、今後も全員で楽しみながら研究を高めていきたいと思っています。(写真の前列左から三浦尚子さん、小林加奈さん、若山沙織さん)



お茶の水女子大学地理学教室 Web サイト <http://www.liocha.ac.jp/hum/chiriog/chiri.htm>

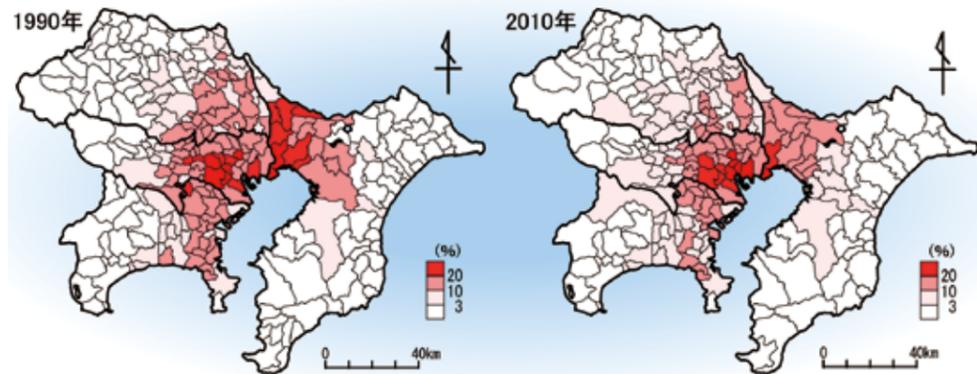


図1 市区町村別にみた東京都心3区への通勤率の変化(1990年、2010年国勢調査より作成)